

会 議 録

会議名 (審議会等名)		令和８年度 第１回キャリア教育推進委員会		
事務局 (担当課)		学校教育課 電話０４２－７６９－８２８４（直通）		
開催日時		令和８年７月９日（木） １０：００～１２：００		
開催場所		市民会館 第２大会議室		
出席者	委 員	２１名（別紙のとおり） ※欠席１名		
	その他			
	事務局	１０名 学校教育課 ５名 教育センター ３名 支援教育課 １名 教育相談課 １名		
公開の可否		☒ 可 ☐ 不可 ☐ 一部不可	傍聴者数	０名
議題		１ 確認事項 （１）本市のキャリア教育について （２）令和８年度の方向性について （３）令和８年度キャリア教育推進委員会等の日程について ２ 全体協議 「令和８年度キャリア教育推進の重点施策について」 ３ グループ協議 「本市のこれからのキャリア教育に求められること」 「未来を切り拓く力を育むために、学校・地域・関係者それぞれができること」		

議 事 の 要 旨

[議事内容、質問及び主な意見] ●委員 ○司会

1 開会

(1) 学校教育部長あいさつ

本市では、第2次相模原市教育振興計画において、「共に認め合い、現在(いま)と未来を創る人」を目指す人間像とし、「温かさと先進性のある教育の推進」等、3つの基本姿勢のもと、教育施策を展開している。キャリア教育の推進は、この振興計画「基本方針Ⅰ 目標1 未来を切り拓く力の育成」の筆頭の施策に位置付けられており、現在、各学校においては、教育活動全体を通じて、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育んでいる。本市のキャリア教育の推進は、令和8年度よりフェーズ3(スリー)に入っており、今年度はその2年目となっている。各校や各中学校区においては、めざす子ども像の具体の設定や、小中で系統性のある目標設定、地域と連携・協働した教育活動など様々な取組が行われ、成果が出ていると承知している。また、学校、行政、関係機関が協力しながらキャリア教育の推進について考える本会議は、本市の大きな特徴の一つである。藤田教授をはじめ、委員の皆様から、忌憚のないご意見をいただき、令和8年度本市キャリア教育の推進につながる、充実した会にしたいと考えている。

(2) 委員の自己紹介

2 確認事項

- (1) 本市のキャリア教育について
- (2) 令和8年度キャリア教育について
- (3) 令和8年度の方向性について

○資料について事務局から説明

3 全体協議

(1) 令和8年度キャリア教育推進の重点施策について

- 土元委員 番号10についてはこども・若者未来局の取り組みである。不登校の児童生徒を支えるために地域において様々な活動がされているが、例えば子ども食堂であるとか無料学習支援といった支援など、それぞればらばらに取組が行なわれているところを会議体や学校、スクールソーシャルワーカー、カウンセラーの持つ情報とつなげ、さらに子どもの支援体制につなげる。そういった意味で子どもが地域の方々と接することで学校以外の社会との接点を作ることになり、社会参画に向けた体験を提供することで、つながる力を育成できる取組だということで、キャリア教育との親和性も高いものである。
- 島田委員 不登校の子どもたちの校内の学びの場は、来年度すべての中学校で人員を配置し、丁寧な支援ができるような環境を整えていく。資料にて大野北中学校での取組があったように、校内教育支援センターが子どもたちの安心した学びの場だけでなく、地域とつなげるプラットフォームになる。今後充実した取組が進められるよう支援を充実させたいと考える。
- 奈良委員 番号9の「共にささえあいサポーター」だが、今年度の高齢・障害者福祉課の新規事業で、こちらは障害のことを知ってもらい、普段の生活の中でちょっとした手助けをするサポーターのことである。本年は痛ましい津久井やまゆり園事件から10年目となることから、障害への理解を一層深め、市民の方一人ひとりが障害のことを知り、ちょっとした手助けをする意識を持っていただくために、共にささえあい生きる社会の実現を目指して「共にささえあいサポーター」の養成を開始した。気軽にサポーターになってもらえるよう20分程度の動画を視聴し、自分は障害者の方にどんなことができるのかを考えていただくことでサポーターに認定している。動画の中では市内の障害者団体の皆様にご協力いただき、困っていることや助けて欲しいことなどについてお話をいただいている。市内の小中学校でも障害の理解を進めて

いきたいということで、小中学校校長会にも報告をし、現在のところ小学校7校中学校1校で養成講座を行っている。支援教育課にも助言をもらいながら、自己理解・他者理解のために小中学生にも講座を行っているところである。

- 西内委員 昨年度までは施策番号縦10ということで、職業的・社会的自立を見据えた特別支援教育における自立活動という位置づけで、支援教育課として重点的に取り組んできた。ただ、いじめや不登校などの様々な諸課題があり、仲間同士が支え合う力や自己理解が足りていないことが推測される中で、今年度からは広い視野を持って障害等の理解、多様性の理解に重点を置いて取り組んでいきたい。キャリア教育と特別支援教育は両輪のような大切な位置づけだと考える。先ほど事務局からのPDCAサイクルの課題のところであった「わからない」「教えて」と発信することや、自己調整するための力が足りていないということなど、自分の得意なところや強みを自覚させるところが課題だという話があったが、まさにそこが自分の学びのスキルや、特性理解につながると考えている。自己理解を進めていく中でこれを自己開示し他者理解につなげて、共にささえあうような児童生徒の育成に取り組んでいきたいと思い、重点とさせていただいた。

- 藤田委員 石井委員より冒頭説明があった第2次相模原市教育振興計画の中で、キャリア形成は筆頭施策になっている。私自身短い期間ではあるが行政に携わった者として、筆頭施策を何にするかは最も神経を使うことであると考えますが、そのような中で相模原市はキャリア教育を大切にしていることが非常によく分かる。また、毎回申し上げているが、大変忙しい中でこれだけの委員が集い、真剣に議論するということは非常に重要なことだと考える。また、このことも毎回申し上げているが、冒頭のスライド6番7番について、「自分には良いところがあると思う児童生徒の割合」「将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合」というところで、まずは「自分に良いところがあると思う児童生徒の割合」が目標値を大幅に超えている。令和2年度は新型コロナウイルス感染症で半年近く学校に行けなかった時代で授業の遅れを取り戻すために詰め込み型の授業が行われており、令和2年度でぐっと割合が下がり、令和4年度から回復傾向が見られるのが全国の傾向である。その中で相模原市はその割合が落ちず、目標値を超えているのはいかに先生方や地域の皆様方が子どもたちを支えているかが、そして子どもたちもその思いを汲み取って頑張っているかが最もよく分かるグラフだと考える。また、「将来の夢や目標を持っている児童生徒の割合」に関して、事務局からは目標値に達していないというお話であったが、コロナ禍の後、様々な国際情勢が変化し、暗い動向が影を落としている中であっても、徐々にではあるが割合を伸ばしている。国際情勢が予見できない中での目標値の設定であったため、目標値は達成していないが、徐々に伸びているのは相模原市の努力の結晶であると強く思う。

スライド16について、全体を通して、めざす子ども像の共有の重要性が何度も繰り返されてきたと思う。めざす子ども像の共有をするときに、相模原市全体ではスローガンのようなものしか共有ができず、全体としての大きな方向性しか言えない。しかし、中学校区で育てたい子ども像を立案するときに、スライド16にある問題をしっかり理解するということは重要であると考えます。「友だちと協力したり、調べたりしている。」「周りの人と協力して学習に取り組みましたか？」は、前者は「協力・調べる」という2つのことを言っており、後者も「協力・学習に取り組む」と2つのことを言っている。これはダブルバーレルだという説明があったが、これはもともと2連発銃のことである。球を2つ込めて同時に飛ばすが結局どちらも当たらないということになってしまうように、一つの目標に2つのねらいを入れてしまうと、結果が上がったにしても下がったにしても、何が上がったのか下がったのかが分からなくなってしまうため、そういったことを皆で意識合わせをしてから、めざす子ども像を作っていく必要とならない。例えば、典型的な例でいうと、かつてニート・フリーター対策としてキャリア教育が出てきたときは、望ましい勤労観・職業観を育てることが目標とされていた。ただ、実際に2、3人のグループで望ましい勤労観・職業観について具体的に話し合う際に、おそらく意見が合致することは少ないと思う。色々な解釈があり、望ましい勤労観・職業観がそれぞれ出てくるが、それを目標としたときに何をもって達成したかが分からないので、やはりなるべく中学校区では行動目標としてめざす子ども像を作っていくという方向性を持っていくと、

PDCA サイクルが回りやすくなるのかと思った。

今回事務局よりコミュニティ・スクールの重要性について話があったが、配付資料に「地域の誰もが先生」という非常に素敵な言葉がある。これに関して兵庫県の事例を紹介する。ある中学校でたくさんピアスをつけている男子生徒がおり、生徒指導をするもなかなか治らなかった。その子が職場体験でどこに行くのかという際に、一番近くの保育園が受け入れてくれ、先生方は非常に心配であったと思うが、注意してもピアスを取らないため、ピアスをつけたままの状態で見送った。取らないまま職場体験を実施したが、30分も経たないうちに2、3歳児が抱き付いてきた。誰も何も言わないが、子どもがけがをしてしまうため、自らピアスを取り、それ以降取ったままの状態職場体験の三日間が過ぎ、そのまま学校にもピアスをつけてこなくなった。あれほど生徒指導で手を焼いた子が、保育所の子どもたちが先生となり、変わった。子どもの成長には先生だけでなく、子どもを含めて地域 みんなが色々な役割を果たせるのだと感じた。

最後に、今回の重点施策である障害のある子どもたち、あるいは様々な問題を抱えている不登校の子どもや経済的困難を抱えている子どもへの支援の充実というのは非常に重要であると考え。表面的には、そういった子どもたちの将来設計やキャリア選択、社会への移行は大きな困難を抱えているため、そういった子どもたちを大切にしたいというのは重要であるが、こういったしんどさというのはその子の問題というよりも、社会環境の課題だと考える。例えば、私は視力が悪くメガネがないと怖くて階段なども下りられないため、いきなり障害者になると思うが、メガネという仕組みがあるから障害者の部類を外れているというだけである。今の障害を持っている子どもたちは不便さを解消する仕組みがまだないため、たまたま障害という位置付けになっているが、その子に対する解決策がまだないだけである。それは外国にルーツを持つ子どもたちや不登校の子どもたち、経済的困難を抱えている子どもたちもそうであり、そういった困難さというのは、その子に問題があるというよりも、そのしんどさを解決するすべがまだない社会の方に問題があるのだから、当然のことながら共に生きるすべを考えていくことが私たちの責務である。かわいそうとかそういう話ではなく、社会を共に進む人間の責務であるため、そういった意味で重点施策とすることは非常に重要であると考え。

4 グループ協議

テーマ「本市のこれからのキャリア教育に求められること」

「未来を切り拓く力を育むために、学校・地域・関係者それぞれができること」

Aグループ

石井紀子委員（司会）、藤田晃之委員、榎本幸良委員、永月徹委員、奈良美幸委員、歌田平委員、加藤雄二委員、福井智之委員、稲野博泰委員、島田真人委員

- 石井委員 「本市のこれからのキャリア教育について、求められること」「未来を切り拓く力を育むために、学校・地域・関係者それぞれができること」について、また「それぞれの課で抱えている課題」等も含め、ご意見をいただきたい。
- 島田委員 教育支援センターで、不登校のお子さんに関わることが多いが、育みたい資質・能力を大切にしたいという取組ということでキャリア教育の果たす役割は大きいと感じている。教育支援センターでは、人間関係にとまどいやつらい思いをしてきた子たちもいる。何をしても楽しくないという子もいる。そういった中で大切なのは「体験的な学び」である。手を動かし、身体を動かしながら、必然的にコミュニケーションを取らないといけない場面をつくるのが大切だと感じており、このようなトレーニングをする場を意図的に設けている。先ほど藤田先生のお話にもあったが、改めて中学校で教育支援センターを設置する価値を感じている。
- 永月委員 先日、研究部会の先生方と目黒区の小学校を視察した。その学校では「自己調整学習」として、1日に数時間、先生は教えず、子どもたちが自分たちで課題を見つめながら進めていく形で学習に取り組んでいた。先生は教えないため、はがゆさもあると思う。参観後に先生方からお話を伺ったところ、結果的に子どもたちの成績は伸びたとのことであった。不登校

の子どもたちは、その時間は自分のペースで学びを進めることができたから、来ることができたというのである。このような事例もあることを知ったのでみなさんに共有させていただく。

- 福井委員 そもそもキャリア教育を進めていくのに、学校でどんな力を身に付けていくのか。学校の8割は授業である。授業には授業の目標がある。その目標を達成する中で、人との関わりを含めて、授業で育む資質・能力とともに、キャリア教育を通して育みたい力を、キャリア教育の視点で価値づけながら取り組んでいる。
中学校区でキャリア教育の研究校もあり、指定校での研究推進がなされている。各教科等の授業や特別活動、その中でも学級活動（1）学級会の中で行っている。発達段階によっても異なるが、話し合いを通して合意形成し、やってみてどうだったかを振り返って捉えていく、という学習過程を大切にしながら進めている。点でやっていた教育活動が線になるのを実感している。
授業改善とともに、子どもたちに身に付けさせたい力を中学校区で共有しながら取組を進めている。
- 稲野委員 キャリア教育で育みたい4つの力について、「学校と地域との連携」とあるが、この4つの力について、どんなアプローチができるか例示しているのか、また、個々の児童生徒について、どんなふうに達成状況を図っているのか、そういう仕組みはあるのか、伺いたい。
- 永月委員 藤野中学校区では、幼保小中の12年間を見通して、「授業を見合うこと」を大切にし、重点とする育みたい力として、「つながる力」と「自律する力」を位置付けている。
学年団を中心に、めざす子供の姿を確認したあと、中学校区で検討し、中学校区で一緒にできることはないか、話し合っている。例えば、中学校では「自律する力」を重点としており、試験前に学習計画を立てて学習に取り組んでいる。また、児童会活動・生徒会活動では、以前は、「先生が言ったことを子どもたちがそのまま行う」こともあったが、現在は、子どもたち発信で、校則の見直し、小学校ではきまりの見直しなどを行っている。
- 稲野委員 キャリア教育を進めていくのに、子どもたちも、より具体的なイメージが持てるとうわかりやすいと思われる。
- 石井委員 以前の学校でもそうだったが、小中の先生方で話し合った上で決まった「中学校区でのめざす子ども像」があり、小中の先生方で、それぞれの発達段階に応じて、どのような力を身に付けていくか、協議していた。そこでは、育みたい力を、「深く考える力」「思いや考えを行動にする力」「自分に負けない力」と位置づけていた。それを地域の方にも保護者の方にも共有しながら、学校評価につなげていた。
- 永月委員 藤野小は、まだコミュニティ・スクールは取り入れていないが、小中の協議会の様子をスクリレというアプリで配信し、学校では「めざす子ども像」をこのように位置づけている、と周知している。
- 歌田委員 中学校区では、どのように進めているのか。
- 石井委員 相模原市では、中学校区には担当の指導主事がおり、コロナ前から年間を通して継続的に担当の中学校区に関わっている。先生方が子どもたちを認め、励ます言葉がけを大切にしている。先程の藤田先生からのお話にもあったが、「自分にはよいところがあると思いますか」の自己肯定感のグラフの数値が落ちなかったのはそのためだと思われる。
- 永月校長 小中の先生方は顔が見える関係性である。また、提案にもあったコミュニティ・スクールについてであるが、町田・八王子・厚木はほとんどコミュニティ・スクールを取り入れている。本市についてはどうか。
- 石井委員 本市では、公民館がとてもしっかりしていることが特徴的である。

- 稲野委員 本市では、コミュニティ・スクールを設置した後に、地域学校協働活動推進員を設置し、必要に応じて、地域学校協働本部を設置する形をとっている。公民館が地域の核になっている。公民館内のコミュニティルームは、自治会や社会福祉協議会、青少年指導員の方などが集い合い、連携することができる場である。地域課題や社会的な課題をみんなで考えていこうとする基盤がある。公民館区と中学校区には少しずれもあるが、地域学校協働活動推進員の設置について、より一層力を入れて取り組んでいるところである。
- 榎本委員 障害者福祉の立場からお話させていただく。「知識」だけではなく「体験する」ことが大切であると捉えている。「障害のある方との自然な会話」という体験をする場がそのひとつである。
自分の役割を実感でき、「自分は誰かの役に立つことができる」と学ぶことができる。また、感謝されること、人の力になれることを実感することで「人を支える仕事」を学ぶことができる。その反対に、「大変さを学ぶ」こともある。こうしたことから、子どもたちの体験的な学びを大切にしている。また、さまざまな講話を聞くことで、自分らしい自己実現を考えることにつなげていけると考える。子どもたちも多様であり、支援が必要な子についても、個別の支援が必要な場面はそれぞれ異なる。また、施設によってできることも異なるので、先生と担当で役割分担をしながら多様な支援のあり方を模索している。
- 歌田委員 創業支援に携わり、プロダクトを作成している。先日も、相模原市在住の都内の大学に通っている学生との関わりの中で、「アントレプレナー、創業支援を応援するような仕事がしたい、コンサルのようなことをやりたい」という話を受けた。その学生が、市内の会社役員と出会い、また行政と出会い、やりたいことに向けて、その機会を広げることができている。キャリア教育の取組が着実に繋がっていると感じている。学校ではキャリア教育の取組、民間ではキッザニアなどもあろうかと思う。
- 稲野委員 先日、ある大学の先生から、新入生の中で「レポートが作成できない」「朝、起きることができない」など、サポートが必要な学生が一定数いるという話を伺った。様々な児童生徒がいる中で、個人の実態に応じて、サポートしていくことが大切だと改めて感じたところである。
- 福井委員 今まさに、次の学習指導要領では「多様性の包摂」など、そのような方向性が示されており、学校や社会がそのようになっていく必要があるといわれているところである。

B グループ

菅原勝委員（司会）、坪井俊樹委員、町田かおる委員、齋藤敦委員、小中信幸委員
土元健一郎委員、上所舜委員、西内一裕委員、布施昭愛委員、網野通委員

- 菅原委員 グループ内には様々なお立場の方がいらっしゃる。ぜひ皆様の声をききたい。特に後半のそれぞれの立場でできることという視点からご意見をいただきたい。新たな方もいらっしゃっているので、まずはその方からご感想含めてご発言いただきたい。
- 網野委員 地域貢献として「租税教室」を長年実施している。税金が社会で果たす役割（社会の仕組み）を、アニメや映像、グループワークを通じて伝えている。実施した学校は、新宿小、南大野小、光ヶ丘小、千木良小（旧津久井地域含む）など。単なる「お金を使う消費者」という視点だけでなく、納税を通じて「社会の形成者・担い手」になる意識を育むことが目的。
- 町田委員 小中学生対象に「職場意識形成支援事業」（ガイダンス）を実施。昨年度は中学校8校で実施したという実績がある。より早期の意識付け（小学生等を対象にした）を目指し、相模原さくらまつりに初出展。子ども向けにアレンジした「ジョブカード」を用いた体験を行

い、保護者からも好評を得た。相模原公共職業安定所の窓口に来る相談者の中には、小中学校時代に不登校等で十分なキャリア教育を受けられず、大人になってから仕事探しに苦労しているケースが多い。また、外国にルーツがある子どもたちへの継続的なキャリア支援も、将来の非正規雇用増加を防ぐために不可欠である。

- 菅原委員 夜間中学で勤務していた際、生徒に対して相模原公共職業安定所の方に来ていただき研修を実施した経験がある。そこにはいろんな世代の方がいて、就職へのハードルが高い。その中にはバイトも見つからないような方もいる。そのような現状がある中、お力を貸していただいていた。
- 坪井委員 1月～12月の年度体制。学校等との動きが違うため、なかなか協力することができていない現状がある。公民館での「子どもの居場所づくり」などの活動を行っている。今年度は、小学校での国際交流（給食を通じた異文化理解）をテーマにした出前授業を計画中である。また、青年会議所OBが個人として「地域の先生」となり、小中学校でESDに関わる授業を行うなどの連携も進めている。
- 齋藤委員 職業体験をはじめ、皆様にお世話になっている。職場体験の前段階として、昨年度より「東京での企業訪問」を開始した。自分のやりたいことや聞いてみたいことを踏まえ、いろいろとインタビューをしてくるような体験。生徒自ら大企業に出向き、「なぜ働くのか」という本音を直接聞きに行く体験。体験後の報告会を通じて下級生に繋げるサイクルを作っている。「高校に入ること」のみを目的化せず、自分の特性を活かした進路選択ができるよう、出口（就職・進学）を見据えた指導を強化したい。
- 布施委員 商工会議所には、以前職場体験の依頼があったため、受け入れ先となる場所が増えるように案内をしていた。他自治体の事例（静岡県藤枝市）として、ホランド理論（職業選択理論）等に基づく自己分析を含む企業紹介パンフレットを紹介。職業定年が延びている。「キャリア・レディネス・テスト」（中学生向け）等の客観的な指標の活用について、市としての取り組み状況や有効性を確認したい。
- 齋藤委員 「キャリア・レディネス・テスト」（中学生向け）については取り組んでいるという話は聞いていない。
- 布施委員 自分にあった職業が見つかる。自分が何に向いているのか確認できる。それは成長過程で変わっていくだろうが、興味関心を持つという意味ではよいものではないかと感じている。
- 西内委員 特別支援教育の中では、「自分を見つめ直す場面」が多いし、重要である。自分の特性などを見つめ直す機会につながるという点においても、キャリア・レディネス・テストはそれにつながる取組だと感じる。
- 上所委員 市内企業を知ってもらうため、小・中・高生（主に小学生が中心）を対象とした職業体験事業を実施。就職を機に市外へと出ていってしまうような若年層の市内への定着（人口減対策）を狙いとしている。当初は中高生をターゲットとしていたが、現在は小学校5・6年生に枠を広げて実施しており、早期の意識啓発に手応えを感じている。
- 小中委員 仕事だけでなく「市民としてどう生活するか」という視点で消費生活総合センターによる出前講座を実施。ネット通販トラブルやゲームの課金問題、クレジットカードの仕組みなど、事例を交えて家庭科の教育研究会等で啓発している。学校からの依頼を増やしたい。
- 西内委員 学校現場においても、ゲームの課金等に関するトラブルやその指導がかなり多く行われている。生徒指導部会等にもPRしてよいのではないかと。

- 菅原委員 小学校でも数十万円単位での被害が出ている例もある。
- 土元委員 少子化対策の観点からも、高校生・大学生等の早い段階から、働くことだけでなく結婚や子育てを含めた「ライフデザイン」を考える機会を提供している。民間企業（生命保険会社等）と連携し、プレコンセプションケア（健康管理）を含めた授業を提供している。

～総括～

- 藤田委員 両グループに共通した話題について申し上げる。Aグループにて、障害者施設の中で職場体験をするということは、役に立つ・感謝されるということが実体験として分かる、併せて仕事に就くということの大切さも分かるというお話があった。そして、Bグループの話を受けて、お金が回っていくことそのものが社会そのものであるということや、何のために働くのかをまず考えてから職場体験に行った方が良いということ、あるいは、ライフデザイン、キャリア教育用語でいうとキャリアプランニング能力、相模原市の用語でいうと見通す力が大切であるという話があったと思うが、これらには重大な共通テーマがあったように思う。榎本委員から話があった、感謝される・役に立つということは働くことの本質であるということだ。私たちが働くときにはサービス・情報・モノのどれかを生み出していると考える。例えば、学校の先生であればサービスを提供しており、生産する方はモノを作り出すし、情報産業の方は情報を提供する。いずれにしても、誰かに届いて、その届いたものが「ありがたい・助かった」と思って受け取られ、それに見合う対価が払われて、その対価が世の中を回り一部が自分の収入となる。つまり、感謝されるということがあって、その感謝がお金という形をとって世の中を回って自分の中に帰ってくる。感謝されるということとお金が回るということは表裏一体だと考える。詐欺や暴力などでの金儲けはそういったサイクルから逸脱しているため、是正していくべき。ただお金を儲ければよいということではなく、感謝されるというプロセスがあり、お金は回ってくるというサイクルの中に自分をどう位置付けるか。その時に重要であるのが、何のために働くかということと、キャリアデザインやキャリアプランニングである。

昨今の世の中の動きは非常に速いため、キャリアデザインを職業の名称で考えてしまうと、5年後10年後には現在ない職業も出てくるかもしれない。職業名でキャリアデザインを考えるのは分かりやすいため、小学生の頃はそれでよいかもしれないが、中学生頃からは誰のために役立ちたいのか、自分の力をどのように使いたいのかを考え、受け手や依頼主などの笑顔を思い浮かべながら努力を継続していくことが重要であると考えます。

相模原市のキャリア教育の成功は、中学校区のニーズに合わせた支援をしていることが大きいと考える。相模原市は規模が大きい自治体ではあるが、先生方の努力が実を結んでいるということ意識しながら、今後も取り組んでいくことが重要であると考えます。特に今回重点課題とされている、障害者等のキャリア教育支援に関して取り組むことは、特別なことではなく、私たちにとって当然のことであるということ、子どもの頃から理解することが重要であるため、重点としていることは改めて良いと考える。

5 その他

次回の日程は、1月28日（木）の実施予定。

6 閉会